# Bグループの少年10

# 第一章　合宿の始まり

剣道部の主将、郷田剛から剣道の指導を頼まれ剣道部の合宿に参加することを受諾した桜木亮は、自身の恋人である藤本恵梨花とその姉である藤本雪奈と共に集合場所へと姿を現した。

その亮は普段学校でしている地味目な姿ではなく、うっかりプライベートモードの格好で登場してしまい、早速部員達を驚かせ、そんな中で移動が始まった。

「まあ、そうなの。剛くんとお付き合いしてるの？」

「えっと、はい、そうなんです」

「もう剛くんも隅に置けないわね！　あなたみたいな素敵な子と付き合ってるなんて！」

「わ、私なんて、そんな……」

「何言ってるんですか！　古橋さん、強くて綺麗で私憧れてるんですよ！」

「ほ、本当に、恵梨花ちゃん……？」

「本当ですよ！」
揺れる電車のボックス席で、藤本姉妹と郷田の恋人である女子主将の古橋が、ガールズトークに花を咲かせている。
そのボックス席から斜めに位置するボックス席に、亮と中学校から友人の神林将志が、同期の友人達といた。
その内の一人が首を伸ばして、恵梨花達のボックス席を覗き見して嘆息する。
「はあ……藤本さん可愛い。あの席に混ざりてえ……」
その言葉にもう一人の同期が頷く。
「だな。この位置からだとお姉さんが見えないのが残念でならない……」
「それな、本当」
「ここに来るまでの間にお姉さんと挨拶したけど、マジ可愛いし美人だし、優しそうで……ダメだ、あと一分でも話してたら魂抜かれてたかも……」
「なんだろうな、藤本さんの癒し効果を更にパワーアップさせた感があるよな」
「あー、言えてる。マジそれだわ」
「つーか、何だよ。桜木のやつ電車に乗って速攻で寝てるけど、寝るなら席替われよな」
周りのボックス席から首を伸ばしてこちらの話に参加していた部員の言葉通り、亮は恵梨花、雪奈、古橋と同じボックス席に座っていた。



「なあ、隣に藤本さんで対面にお姉さんだろ？　……クソッ、羨ましすぎて狂いそう」
対面で項垂れる同期二人に将志が苦笑していると、頭上に影が差した。
「あのさー、亮と席替わったって、意味ないんじゃない？」
そう言って首を伸ばしてきたのは、亮や恵梨花がいるボックス席の隣で、将志達の後ろのボックス席にいた、将志の恋人であり、同じく亮とは中学校から友人である成瀬千秋だ。
「なんだよ、成瀬。意味ないって？」
不貞腐れたように問う同期に、千秋は訳知り顔で答えた。
「だから前提条件が間違ってるって。亮がいるからその隣に恵梨花が座って、亮と恵梨花がいるからその対面にお姉さんがいる訳でしょ？　お姉さんの知り合いって、主将と亮ぐらいみたいだし。亮が席を替わろうと動いたら二人も一緒に動くに決まってるじゃんって話」
「……はあ。そうだよな。わかってるんだよ、そんなことは……」
両手で顔を覆って更に項垂れる同期に、千秋は苦笑を浮かべてから言った。
「それにさー、恵梨花とあのお姉さんに囲まれて、緊張せずに話せんの？」
「……無理だな」
「ああ、俺にも無理だ。舞い上がって何も話せない気がする……」
同意するような声が他のボックス席からも聞こえてくる。
「はあ……まあ、いいや。この合宿中に少しでもお話が出来たら、それだけ幸せが増えると思って

機会を窺おう」
「俺はあの二人の風呂上がりの姿を見られるだけでも幸せになれる自信があるぞ」
「それは間違いないな」
「なあ」
その声が聞こえた男子部員が揃って、浮かれたような声を上げていた。
「にしても、羨ましいとこに座ってるな桜木……」
「本当にそれだわ。しかもそこで寝るって……なんて勿体無い」
「違いない」
またも同じ話で愚痴り始める男子部員達に、将志と千秋が苦笑する。
「つーか、桜木だよ。なんだよ、アレ」
「なあ、印象がいつもとまるで違うんだけど」
そこで将志の隣に座る野村も話に入る。
「そうだ、何だよアレ。将志と成瀬はあまり驚いてなかったように見えたけど知ってたのか？」
問われた二人は揃って視線を彷徨わせる。
「ノ、ノーコメントで」
「その回答でわかったぞ。桜木のやつ、元々はあの格好なんだな？」
「そういえば、前に眼鏡外して試合してたよな……？」



「つまり、あれは度なんて入ってない伊達眼鏡ってことか！」
「学校じゃ、擬態してたってことか……」
「なんか色々繋がってきたぞ！　藤本さんはあの桜木を知ってたから付き合ったのもあるんだな？」
「藤本さんが付き合うにしてはダサすぎると思ってたんだよ……」
「今見たら普通に格好いいじゃねえか……」
「は、はは……」
将志と千秋が二人して乾いた笑い声を上げる。
「てか、何で学校じゃ、あんな似合わない格好やってんだ？」
「……目立たないため？」
「……何でだ？」
「さあ？　それにあいつ、以前にも俺達に口止めしてたじゃねえか。今日起こったことは誰にも言わないって」
「……そういや、そんなことあったな。え？　じゃあ、それって目立たないための口止めだった訳か」
「そういうことだよな」
「あっきれた……何で、そこまで？　ダサい髪型に伊達眼鏡までして？」
「それはわからんが……でも、そういうことじゃねえの？」
「……そうなるか」

将志と千秋は余計なことを言わないように黙っていた。
「だとしたら、あいつとんだ嘘吐きだな」
「ああ、朝の言い訳聞いたか？」
「皆で質問浴びまくった時のだよな？　……アレは酷かったな」
「なあ。いや、『夏休みデビュー』って何だよ」
そう、擬態をしていない亮が亮だと知られ、皆から問い詰められ、盛大に目を泳がせ誤魔化すようにして亮の口から出たのが『ほ、ほら、アレだ。夏休みデビューってやつだ！』だったのだ。
その如何にも今思いついたような言い訳に『うわあ……』といった目を向けられたり、胡散臭く思われたりしたのは言うまでもないことである。
その後は電車の時間も迫っているということで、移動が開始され、すみやかに電車に乗ることになったのだ。
ちなみに言うと、亮が適当な席に座ると、当然の如く隣に恵梨花が座り、雪奈は亮の正面に流れるように腰を落とした。そして電車が動き始めるとあっという間に亮は寝入り、それから女子主将の古橋が挨拶に来て、恵梨花が郷田の彼女だと仄めかすと、雪奈の熱烈な歓迎をもって空いてる席を勧められ話が盛り上がり始めたのである。
「しかも使い方間違って……るよな？『夏休みデビュー』って」
「いや、どうなんだろうな？　夏休みの間に髪染めとか色々やって、夏休み前とは違った姿を見せ



つけるように学校に来ることが夏休みデビューだって言われてるけど……」
「……夏休み中に姿が変わったって考えると、間違ってない……？」
「……いや、なんか違う気がするんだが……？」
「ともかくだ、あいつがなんか適当なこと言ってると思った時は嘘だと思った方がいいな」
「違いない」
「てか、あいつ本気で誤魔化す気あんのか……？」
首を傾げる友人達を横目に、将志はため息を吐いた。
（……亮、もう剣道部では諦めた方がいいぞ……）

◇◆◇◆◇◆◇

電車が揺れたためか、椅子にもたれて寝ていた亮が傾き、亮の頭部が隣に座る恵梨花の肩にスッポリと収まる。
「あ……」
思わず声を漏らした恵梨花であるが、これはなかなかのチャンスではと思い、すかさず姉の雪奈へとスマホを渡した。
「ユキ姉、写真撮って！」

「はいはい――はい、チーズ」
苦笑にも似た微笑(ほほえ)みを向けられ、恵梨花ははにかみながら亮との写真を撮ってもらった。
「ありがとー」
「いいえ――そうだ、古橋さん。折角だから、私もハナと亮さんとの三人での写真を撮ってもらっていいかしら」
「あ、はい、いいですよ」
そうしてスマホを渡された古橋により、寝ている亮を挟んで雪奈は恵梨花と写真を撮ってもらう。
「ありがとう、古橋さん」
「いえいえ」
「ねえ、ハナ。ツキにこの写真送ったらどうなるかしらね？」
ツキ――一番下の妹である美月(みづき)のことを思い出しながら、雪奈がそう言った。
「あはは、きっと拗(す)ねると思うよ」
「ふふっ、やっぱりそう思う？」
「そうに決まってるじゃない。ツキも行きたかったー！　って言ってたし」
「遊びに行くんじゃないのにね、ふふ」
二人して笑い合っていると、古橋が首を傾げた。
「妹さんも桜木くんのことよく知ってるの？」



「よく知ってるどころか、実の兄より懐いてますよ、最近は」
「そうね、亮さんも嫌がらずにあの子に構うから、どんどん甘えちゃって」
「おかげでお兄ちゃん拗ねてるけどね」
「いい薬よ」
「あっはは」
再び姉妹で笑い合っていると、古橋が意外そうに言った。
「恵梨花ちゃんのお兄さんとも親しそうだったし、妹さんまで？　桜木くんってそういうとこ意外に強(したた)かなんですね。すっかり外堀埋めちゃってるみたいで」
その言葉に、恵梨花は雪奈と顔を見合わせて噴き出した。
「古橋さん、それは誤解ですよ。亮くんからしたら、事故に遭ったみたいなもんなんですよ」
「そうねえ。最初は私とお母さんだけに会う予定で家に来たんだったものね」
「……そうなんですか？」
「そうなのよ。そういう予定だったのに、うちの末っ子が引っかき回しちゃって、私達が相対させまいとしたお父さん、お兄ちゃんと遭遇させてしまって……」
頬(ほお)に手を当て、嘆かわしいと言いたげに息を吐く雪奈。それを見た古橋が見惚(みと)れたように、ほうと頬を染めた。
そんな古橋の様子から、最近自分の姉が頓(とみ)に色気が増してきたように思っていた恵梨花は、それ

が間違ってなかったと思い直した。
「まあ、結果オーライで終われたんで、良かったんですけどね」
「へえ。え、じゃあ、桜木くんって、恵梨花ちゃんの家族全員とじっくり顔合わせ済み……？」
「あ、あはは、そうなんですよ。お母さんも亮くんのことすごく面倒見ようとしたり、お父さんは亮くんからマッサージ何度もしてもらったりで……」
「へ、へえ……？　え、マッサージ？」
「そうなんです。うちのお父さん長いこと腰が悪かったんですけど、亮くんが施術してから、すっかり良くなって」
それを聞いた古橋は驚愕したように目を丸くした。
「さ、桜木くんってそんなことまで出来るの⁉」
「何でも、おじいさんに仕込まれたって言ってました」
「すごかったわよね。お父さん、腰が曲がるってはしゃいで浮かれてたしね」
「あははっ、そうだった。靴下が苦労せず履けるってやって見せてたよね」
姉妹が思い出して笑っていると、古橋が呆れたように首を振っている。
「はー……なんか、桜木くんって知れば知るほど、印象が変わってくるわね……」
呆れ以上に感心したような言い方でもあって、恵梨花は苦笑した。
「それ、私でもまだ時々思うんですよね」



「え、恵梨花ちゃんまで？　今も？」
「そうなんですよ。亮くん、なかなか自分のこと話さなくって……」
最初は隠してるのかと思っていた時もあったが、そうでないことはわかっている。
単に話し忘れていたり、話すまでもないことだと思っていたりするのだ。
「はー……そうなんだ、そう聞くとなかなか大変そうね」
「ええ――でも、一緒にいると楽しいですよ。ビックリ箱みたいで」
はにかんで恵梨花が言うと、古橋はボケッと口を開いて彼女を見たかと思えば、顔を赤くして俯いた。
「そ、そう……」
「？　どうしたんですか？」
「う、ううん、何も……」
そんな二人を雪奈が苦笑を浮かべて見ていた。
「ご、ゴホンッ、え、えーっと、そうだ。さっきから気になってたんですけど、聞いてもいいですか、ユキさん？」
気を取り直すように咳払いした古橋が、雪奈にそう声をかける。
「私？　何かしら？」
「えっと、どうして、桜木くんに敬語なんですか？『さん』づけで呼んでるみたいですし……私

やユキさんより歳下じゃないですか、桜木くんって」
素朴な疑問に、雪奈は困ったように眉を寄せた。
「あー……」
「えっと、答えにくいのでしたら無理には聞きませんけど……」
慌てたように手を振る古橋に、雪奈は苦笑した。
「そうね……恩人だから。これ以上は言えないかな？」
「お、恩人……？　ですか」
「そうなの。何の恩人かっていうのも伏せさせてね？」
片目を閉じて内緒、と言いたげに口の前に人差し指を当てる雪奈に、古橋は顔を赤くして躊躇いがちに頷いた。
そこで恵梨花の席の後ろからくぐもったような音が聴こえてきた。
「んぐ――!?」
そして慌てたように、ドンドンと胸を叩いたような音がしたかと思えば、恵梨花の頭上に影が差した。
恵梨花が振り返ると、郷田が唖然とした顔で立っていた。
「タケちゃん？　どうし――あ」
郷田が何に驚いてるのか、恵梨花は悟った。



こちらの会話が聞こえていたのだろう。
「ユ、ユキさん、あ、あなたにとっての恩人って言えば――」
喘ぐように郷田が声を出すと、雪奈はあちゃあと言いたげに額に手を当てていた。
「――剛くん。それ以上は、ダメよ――？」
郷田は信じられないように目を見開く。そして恵梨花の隣で眠る亮を見下ろし、ゴクリと喉を鳴らした。
「ゴ、ゴールド――」
「――タケちゃん!!」
郷田は直接聞かされていないが、雪奈が誘拐事件に巻き込まれていたことを幼馴染として察していた。そしてその彼女が恩人と呼ぶ亮こそが、事件を解決したゴールドクラッシャーである――
全てを察して口走りかけた郷田を、恵梨花は制した。
郷田はハッとすると、再び喉を鳴らしてコクコクと頷いた。
「あ、ああ、わかった……」
恵梨花と雪奈に向かってそう言った郷田は、もう一度、亮に目をやってから呆れたように首を横に振った。
「――道理で純貴さんとおじさんに認められる訳だ……」
ある意味間違ってないかもしれないが、誤解は正そうと恵梨花は補足した。

「あ、タケちゃん、それ知られる前にお父さん、お兄ちゃんから亮くん認められたからね？」
郷田は再び驚き目を見開いた。
「そ、それはそれで信じられんな……」
「あはは、だよね」
思わず恵梨花が笑い声を上げると、郷田は気が抜けたような顔をして腰を落とした。
「え、えーと……何かあまり聞かない方がいいっぽいわね……」
空気を読んだかのように言った古橋に、恵梨花はペコと頭を下げる。
「す、すみません……」
「ううん、いいけど……」
気になるだろうにここで終わらせてくれる様子の古橋に、恵梨花はホッと安堵の息を吐いた。
「……どうしよう、ハナ。秘密なのに……」
雪奈が心底困ったような顔で、亮を見ている。
「あー……大丈夫、だと思う。亮くん、知られたら面倒だから嫌がってるだけで、タケちゃんが黙っていれば問題ないような……」
「……だといいけど——ああ、でも申し訳ないわ」
そう言って頭を抱えそうになったところで、恵梨花の耳にため息を吐くような音が聞こえた。
「……別に構わねえから、気にすんな、ユキ……」



気怠そうな声を出しながら、ノソリと亮が身を起こした。
「亮さん！　……起きてたんですか？」
雪奈が目を丸くして問いかけると、亮は「くあ」とあくびをして答えた。
「……半分な」
「半分……？　途中から聞いてたってことですか？」
亮は眠そうに目を擦りながら、雪奈の言葉に首を横に振った。
「いや、俺ってこういう人がいる場所で寝てても、半分ぐらいは意識起きてるからな。だから、その間でもある程度、周囲の話は聴こえてる」
恵梨花は何となくそうじゃないかと思っていたので、やっぱりかと内心で頷いていた。
「そうなんですか⁉」
雪奈だけでなく、古橋も目を丸くすると、亮は頷いた。
「まあ、そういうことだから、気にするな——おっさんだって、いちいち言い触らしたりしねえだろ？」
後半は後ろにいる郷田に対してのものだった。亮が首を回してボックス席の向こうへ声をかけると、郷田も立ち上がらずその場から「ああ、わかってる」とだけ声を返してきた。
「——らしいぞ。だからユキも気にすんな」
そう言って肩を竦める亮に、雪奈はホッと安堵の息を吐いた。

「えっと、でも……ごめんなさい、亮さん」
「もう、いいって――あ、恵梨花、肩借りてたな、すまん」
思い出したように告げられて、恵梨花は首を横に振る。
「ううん、もう起きるの？」
「あー……後どれぐらいで着くんだ？」
その問いに答えたのは、古橋であった。
「後、二十分ってとこかな」
「そうですか……じゃあ、もう起きておくか」
言いながら亮は腕を上げて伸びをする。
そんな亮を、古橋がマジマジと見ていた。
「えーと、何か……？」
亮が困惑気味に目を向けると、古橋はハッとして手を振る。
「あっと、ごめんなさい」
「いえ……？」
尚も訝しげに目を向けられて、古橋は誤魔化すような笑みを浮かべる。
「あ、はは……いやね、よくよく見てみると、すごく自然体に見えてね」
「……？」



「ふふ、その反応から、その格好こそが桜木くんの自然な格好なんだってわかるよ」
今の擬態していない格好こそが自然な姿なのだと、改めて指摘されたことに、亮が思い出したような顔になる。
「あー……」
そして気まずげに亮が目を逸らすと、恵梨花、雪奈、古橋は苦笑を浮かべる。
「学校にいる時でもそうしてたらいいのに……うちの部の子達、目を瞠ってたわよ？」
古橋がからかうように言うと、亮はどう言ったものかと悩ましげな顔になる。
「ああしてた方が地味に――目立たずに済むじゃないですか？」
「んー……確かに地味だけど、でも目立たずにって――？」
言いながら古橋は恵梨花へ視線をスライドさせた。
「ああ、いや、その先は言わなくて大丈夫です。わかってます」
堪らず亮は苦笑すると、ポリポリと頬を掻いた。
恵梨花と一緒にいる時点で目立っていることについては、何度も言われていることである。
「そ、そう……」
「まあ、でもよくよく考えたら、髪型に関しちゃ時間の問題だったな。この合宿中にシャワー浴びたり風呂入ったりする度にあの髪型にするのは、流石に面倒だし」
「え、あの地味な髪型の方が、セットに時間かかったりするの？」

目を丸くする古橋に、亮は頷く。
「ええ。濡れて乾かすと今の髪型になるんで」
「亮くんって、意外に癖っ毛だよね」
「まあな」
恵梨花にそう答える亮を、古橋が呆れたように見て首を振っていた。
「わ、わざわざ手間をかけてあの地味な髪型にするなんて……」
「はは……まあ、もう習慣になってますし」
そう言って肩を竦めた亮の腹から、ぐうっと空腹を主張する音が聞こえてきた。
「……腹減ったな」
ため息と共に吐き出されたその言葉に、恵梨花と雪奈は苦笑して、荷物を開いた。
「そろそろだと思った……おにぎり食べる？」
恵梨花がラップで包んだ大きなおにぎりを出すと、亮は目を輝かせた。
「おお……！　勿論食う！」
「ふふっ、はい、どうぞ」
ラップをめくってから渡すと、亮は「いただきます」を告げると早速とばかりにかぶりついた。
「亮さん、お茶ここに置いておきますね」
雪奈が窓際に水筒から注いだお茶が入ったコップを置くと、亮は口いっぱいにおにぎりを頬張っ



たままコクコクと頷いた。
この至れり尽くせりな一連の流れを見て、古橋がポカンとしている。
「どうしたんですか、古橋さん？」
小首を傾げる恵梨花に、古橋はハッとして口を開く。
「な、なんか、すごく慣れてる感じね。恵梨花ちゃんは流れるようにおにぎり出したし、ユキさんもササッとお茶汲んだりして……」
そう言われて、恵梨花は雪奈と顔を見合わせ苦笑する。
「いつものことですから」
「そうね。もう自然と動いちゃうわね」
そんな二人に、古橋は目を瞬かせた。
「……え、桜木くんって、そんなによく恵梨花ちゃんの家行ってるの？」
「あー、そうですね。よく来て、ご飯も一緒にが多いですね」
「はー……本当の本当に家族ぐるみじゃない」
「あ、はは、そう、ですね……」
少し照れながら恵梨花が答えると、あっという間におにぎりを食べ終えた亮がお茶を一口飲んで、いつものように言った。
「おかわり、ある？」

「はい、亮さん、どうぞ」
今度は雪奈の鞄から出るおにぎり。
「お、ありがと」
そして亮が大口で頬張るのを見て、古橋が躊躇いがちに言った。
「えーと、桜木くん、一応、電車降りて少ししたらお昼になるんだけど……」
「ああ、大丈夫です、古橋さん。おにぎりはそれまでの繋ぎですから」
亮に代わって恵梨花が答えると、唖然とする古橋。
「繋ぎって……え、おにぎりが？　その大きいの二つが？」
そんな古橋を見て、恵梨花と雪奈は苦笑を浮かべ合う。
そうこうしている内に、電車を降りる時間が来る。
そして電車を降りた亮が、男子部員達からこれでもかと怨嗟の目を向けられたのは言うまでもないことだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「桜木が恨めしい……」
「ちょっとお姉さんとも仲良すぎじゃねえか……？」



「家族ぐるみにしてもほどがあるだろ……」
駅から合宿に使う民宿までは少し距離があり、今はそこへ向かって歩いているところである。
その最中で、藤本姉妹と並んで歩く亮の背中を、男子部員達が恨みをぶつけるように睨んでいた。
「藤本さんと付き合ってるんだから、お姉さんは譲ってくれよ……！」
「言い分滅茶苦茶だけど、本当それ」
「……今はお姉さんと親しい関係の人間が少ないからと納得するしかないか」
「こ、この合宿の間で少しでも……！」
「だな……」
彼女のいない男子部員達の心が、一つになった瞬間である。
「しかし、暑いな……」
「まだ山の中だからマシじゃね……？」
「まあな……お？」
「なんだ？」
「動物注意の標識がある。あれは……狸の絵か？」
「ああ、狸だな。俺こんな標識初めて見たかも」
「ほー……あ、またあった……今度は猪か」
「猪か……結構美味いらしいな」

「ジビエだしな……捕まえてみるか？」
「馬鹿、そういう素人考えするやつがいっつも怪我すんだよ」
「そうそう、毎年何人怪我してると思ってんだよ」
「あ、俺家族で旅行した時、車降りて目の前で遭遇したことあるぞ」
「お、マジで。どうだった？　捕まえられそうだったか？」
「いや、無理無理。なんつうか、呼吸音とか結構いかつくて迫力すげえ。対面したらビビるぞ」
「へ、へえ……え、対面してどうなったんだよ？」
「俺のすぐ横をすげえスピードで走ってった。いや、マジで速いぞ。それも重量感も半端ない。めっちゃビビった。あれに突進されたら普通に怪我するってよくわかったわ」
「ほー……結構貴重な体験だな」
「ああ……あれ体験したら、銃も無しに相手しようなんて思えねえぞ」
「なるほどな……お、また標識――って、おい……」
「え、熊じゃねえか、あれ」
「おいおい、いいのかここ歩いてて」
「……音に敏感って言うし、人数多ければ大丈夫なんじゃね……？」
「そ、そうだな……」
「熊か……熊もジビエだよな」



「まあ……なかなかに高級肉らしいな」
「誰か食ったことあるやついるか？」
「……」
「いないか……」
「あー、肉の話してたせいで腹減ってきた」
「てか、もう昼だしな」
「お、あそこじゃね？　民宿」
「やっと着いたか……」

◇◆◇◆◇◆◇

「それでは各自、さっき古橋さんから割り当てられた部屋で着替え、必要な荷物だけ持って三十分後に玄関前で集合するように。では解散！」
郷田のその号令により、恵梨花は亮、雪奈、部員達と共に食堂の席から立った。
「はー……物足りん……」
亮がお腹に手を当てて力なく呟くのを目にして、恵梨花は困ったと眉を寄せた。
「普通のお弁当だったけど……亮くんには少なかったよね」

「そうね。亮さんなら、少なくともあのお弁当の三つぐらいは必要かしら？」
悩ましいと雪奈が頬に手を当てている。
民宿に着いて、まずは昼食と食堂に入った訳であるが、用意されていたのはごく普通の仕出し弁当であったのだ。
量は当然の如く一人につき一人前で、到底亮の胃袋を満足させるようなものではなかった。
亮は首を横に振りつつ、諦めるように息を吐いた。
「はあ……まあ、仕方ねえ。我慢出来なくなったら、後で山の下まで走ればいいか」
「大丈夫……？」
「電車でのおにぎりが無かったら厳しかったところだな」
「ふふっ、用意しててよかったね」
「ああ。まあ、最近が恵梨花の家で贅沢しすぎてたんだ。これはその分だと思えば……」
「ええ、何それ？　あはは」
席を立ってもそうやって笑い合い、部員達の前でイチャつく亮に向かう視線は、なかなかにひどいものであった。
苦笑して見ていた雪奈が恵梨花に声をかける。
「ハナ、私達もそろそろ着替えの用意しないと」
「あ、そうだったね。じゃあ、また後でね、亮くん」



「おう――あ、ちょっと待て。ユキも」
「なに？」
「何ですか、亮さん？」
呼び止められた二人の前で、亮は鞄を開け、中から白い何かを取り出した。
「ほら、これ」
そして渡されたのは、白い衣類だった。
「？　これって……道着？」
「ああ。家の道場の道着だな。サイズはそれで問題ねえはずだ」
亮は祖父が師範を務める道場で、物心つく前から鍛錬を積んできた。
「え、これ私の道着なの⁉」
「私の分もですか⁉」
驚き戸惑う恵梨花と雪奈に、亮は当然といったように頷いた。
「ああ。これから四日間俺から指導受けるのに、ジャージ着るつもりだったのか？　それじゃ、色々不足するからな」
「そ、そうなんだ……わかった。ありがとう」
「あ、ありがとうございます。亮さん」
「おう」

「うわー、私の道着かあ。お兄ちゃんとツキも持ってるから、道着自体はよく見るけど」
「そうね、なのに新鮮よね」
亮から渡されたという理由が大部分を占めるが、自分の道着を嬉しく思う恵梨花と雪奈に、亮が苦笑する。
「あ、亮くん、これ帯ってどうやって締めるの？」
「ああ、帯は――ってここで説明するのもな……」
そう言って、亮は食堂の中を見回した。
「――ああ、いた。おーい！」
亮が声をかけた先には、三名の女子部員がいて、その内の一人が振り返った。
「――え、私？」
「ああ、そう、あんた。ちょっと頼みてえんだけど」
首を傾げながらやってきたのは、亮には見覚えはないようだが、同学年の長門真央である。
「何？　桜木くん」
「ああ、この二人が道着に着替える時、手伝ってやってくれねえか？　いや、いいですか？」
「あははっ、私、同じ二年だから敬語いらないよ」
「あー、そうなのか」
頬をかく亮に、恵梨花が助け舟を出す。



「そうだよ、亮くん。長門真央ちゃん」
「そうそう、長門真央です」
同級生であることも名前も把握していない亮に、気を害した様子もなくニカッと笑う真央。
「あー、すまん」
「別にいいよ。碌に話したこともなかったし――んで、何の用だって？」
「ああ、この二人が着替える時に手伝って――具体的には帯の締め方とか教えてやってくれねえか？」
「帯？　ああ、うん、いいよ」
真央は気安く請け合ってくれた。
「助かる。じゃあ、頼んだ」
「うん、わかった……？　あれ？」
真央は怪訝そうに首を傾げた。
「？　どうした？」
「えと、あの、何で私が帯の締め方、知ってること知ってるの……？」
亮が渡した道着は、剣道着とは帯の締め方が違う。
その疑問を覚えたのは真央だけでなく、恵梨花と雪奈もだ。
「何でって、やってたんだろ？　柔道」

当然のようにそう指摘する亮を見て、恵梨花は「ああ」と察した。いつものかと。
「ええ……？　あれ？　言ったっけ、私？　いや、知ってたの？」
今度は怪しむような目になった真央に、亮は目を瞬(しばたた)かせた。
「あ、あー……」
そこで頭をガシガシと掻いた亮は、恵梨花に目を向けた。
「恵梨花、説明頼んだ――じゃあ、俺も着替えてくるから」
それだけ言って、亮は踵(きびす)を返して部屋へ向かって行った。
「えーと……恵梨花ちゃん、どういうこと？」
不思議そうに問われた恵梨花は、乾いた笑みを浮かべた。
「あはは……」

◇◆◇◆◇◆◇

「あと、まだ降りてきてないのは……古橋さんのところか」
胴着に着替えた郷田が、民宿の玄関前を見渡して確認するように呟いた。それを横で聞いた将志は尋ねる。
「藤本さん達もまだですね。藤本さん達は、古橋さんの部屋と同じなんですか？」



「ああ。姉のユキさんは女子の中で、元からの知り合いなどいないからな、彼女に同室を頼んだ」
「ああ、なるほど……」
剣道部からしたら、恵梨花は部外者であるが、同じ学校の生徒だからこの合宿に参加するのはまだわかる。
が、その姉の雪奈は学校とは関係なく完全に部外者と言える。そんな雪奈と幼馴染(おさなじみ)である郷田は、合宿中の彼女が肩身の狭い思いをしないよう、女子の主将であり自身の彼女でもある古橋に、色々と便宜を図るよう頼んだのだろう。
そんな二人が参加することになった原因、というより、剣道部が依頼して参加することになった亮は、玄関脇で民宿の人と何やら話している。
ちなみに亮の割り当てられた部屋は、当然の如く、友人の将志と同じである。と言うより、二年生は亮含めて一室に纏(まと)められたというのが正しいか。
郷田が亮をチラッと見て、首を振りつつ呟いた。
「……多少予想はしていたのだが、とんでもないな……」
恐れ入ったような、感じ入ったようなその物言いに、将志は苦笑を浮かべた。
（……知ってる俺でも、圧倒されたしな……）
これからの練習に向けて亮も当然着替えているが、纏っているのは剣道の胴着でなく、自前の道着で、腰には当然のように黒帯がある。胸元には、道場の名である『櫻義(さくらぎ)』の文字。

ほとんどが紺色の胴着を着る剣道部員の中で一人だけ白の道着なので、将志と一緒に降りてここに来た時は、非常に注目を浴びた。
だけでなく、部員達は気圧されてしまったのである。
何せ道着を着た亮は強者特有の風格、貫禄をこれでもかと発していた。溢れんばかりの覇気は目に見えるかのようで、部員達はつい後ずさってしまったほど圧倒されたのだ。
（中学の時にも道着姿は見たことあるけど、あの頃と発してるものが比べものにならない……）
一体、どれだけ強くなっているのかと、亮を目にして口数少なくなった部員達の中で、将志はため息を吐いた。
「なあ、おっさん」
民宿の人との話を終えたのか、亮が周囲の少し重くなった空気など気にしてないかのように、郷田に声をかけてきた。
「なんだ？」
「ランニングってやるんだよな？　どこでやる予定なんだ？」
「？　それは、今から向かう道場でやる予定だが」
「ふうん、そっか……」
どこか肩透かしを食ったような亮に、郷田は不思議そうな顔になった。
「それがどうかしたのか？」



「いや、折角山に来てんだから山の中走ったらどうかと思っただけだ」
そう言って肩を竦める亮に、郷田は「なるほど」と頷いた。
「それもいいかもしれんが……道着を着て、この炎天下で走ったりしたら、熱中症どころでないからな」
「それもそうだな。まあ、練習内容にケチつけたい訳じゃねえから、そこは好きにしたらいいさ」
「……いや、気になることがあったら言ってくれたらいいんだぞ？」
「ああ、わかってる。元々そういう話だしな」
了承する亮に郷田が頷くと、周囲が浮ついたようにざわついた。
玄関から古橋と共に恵梨花達が出てきたのだ。
藤本姉妹は亮と同じ、胸に『櫻義』と書かれた道着を着ている。ただし亮と違って帯は白だ。
更には髪型も変えてきている。恵梨花はポニーテール、雪奈は片側に三つ編みのように纏めて前に垂らしている。それが可愛いのは勿論だが、道着姿が妙にチンマリしているように見えるのだ。
将志のすぐ近くの部員達が、あんぐりと口を開く。
「おいおい、道着姿なのに可愛いってなんだよ……」
「道着が可愛く見えたのって初めてだわ」
「いや、良く見ろ。道着じゃなくて、来ている藤本さん達が可愛いだけだ」
「いや、わかってる。わかってるけどよ……」

「とにかく反則的に可愛いわ……」
まったくもって同感だと、将志も大きく息を吐いた。
そんな注目を浴びている二人は、こちらを――正確には亮を見つけるとハッとした表情で寄ってきた。
「うわあ、亮くん、似合うと思ってたけど、やっぱり道着姿似合ってる!!」
「本当に。私達と違って着せられてる感がまるでないわ」
そう褒められた当の亮はと言えば、口を半開きにして呆然としていて――明らかに二人に見惚れていた。
「――あ、お、おう、ありがとよ。二人も……いや、二人はなんか反則臭い感じだな」
亮のその言葉に、思わず頷いてしまった者が男女問わずいた。
「え、何それ？」
「？　どういうことですか？」
「いや……何でもない」
亮はわずかに頬を染めて、二人から目を逸らした。
そこで将志は、同じく見惚れていた郷田に声をかけた。
「主将、これで全員揃ったんじゃ……？」
ハッとした郷田は気まずそうに「ゴホンッ」と咳払いをした。



「それでは、これより道場に向かう――地元の人に迷惑をかけないためにも、列を乱さんようにな」
民宿から道場までは、歩いて数分の距離であった。
「荷物を隅の方に置いたら、早速練習を始めるぞ、あっちの壁を正面として、いつものように並ぶようにな」
道場に到着すると郷田は一息吐く間もなく部員にそう伝達し、全員からの気合の入った返事が道場に響いた。
そんな中で、恵梨花と雪奈が亮へ目を向ける。
「亮くん、私達はどうするの？」
「剛くんの号令につられそうになったけど、私達は剣道の練習に来た訳じゃなかったわね」
二人から疑問を向けられた亮は、少し考えてから郷田へ声をかけた。
「なあ、おっさん。練習を始めるっても、いきなり竹刀振る訳じゃねえんだよな？」
「うん？　ああ、まずは準備運動として体操と柔軟をして、軽くこの中をランニング、だな。それからだ、竹刀を持つのは」
「そうか――じゃあ、恵梨花とユキは、そこまで一緒に参加させてもらえばいい」
亮がそう言うと、耳を傾けていた男子部員達がピクと反応し、ガッツポーズをとった。
「わかった。でも、ランニングかー。ついていけるかな……？」

「そうね……亮さんは、どうされるんですか？　そこまで私達と一緒に参加されるんですか？」
雪奈の問いに、亮は首を横に振った。
「いや。その間、俺は隅っこでストレッチしてるわ。電車の中で多少体冷えたから、重点的にやっとく」
「？　そうなの？　じゃあ、その後から私達に？」
「ああ。じゃあ、おっさん、少し頼んだ」
「ああ、任せろ」
どこか張り切ってるかのように、郷田は快く頷いた。

「いーち、にー、さーん、しー――――……」
そうして前に立つ郷田の号令で体操から始まる。
部員はいつもの位置に並ぶので、恵梨花と雪奈は自然と最後尾に二人で並ぶことになった。
存在感抜群の二人がそんな位置にいたためか、体操をしながらチラチラと後ろを振り返る男子部員が続出し、女子部員に呆れの目を向けられたのは避けられないことだったのだろう。
将志もついつい目を向けてしまい、その一回で千秋と目が合って二コリと微笑まれ、後が怖くなったために、郷田へ意識を向けることに集中した。
そんな中で、そういえばと隅にいる亮に視線を移した部員がギョッとする。



「おい、桜木の方見てみろって……」
「うん？　……お、おおう……」
「あいつ足が百八十度開いてねえか……？」
「その上で腹がぴったり床についてるっぽいな……」
「どんだけ柔らかいんだよ……」
これをきっかけに、藤本姉妹より亮に注目が集まるが、当人は黙々とマイペースにストレッチをしていた。
「うわあ、桜木くん、柔らかっ……」
「ちょっと、何あれ。両足を頭の後ろに引っ掛けてるわよ……そこから更に腕だけで体持ち上げてるし……」
「タコみたい……なんか自分の足に絡まりそう……」
「テレビ以外であんなに体柔らかい人初めて見たかも……」
そんなざわめきの中、亮は先ほど口にした通り、じっくりとストレッチを行(おこな)っていた。
そうこうしている内に、全体の準備運動が終わり、ランニングまで完了する。
そしてやはりというか、日常的に運動をしていない恵梨花と雪奈の二人だけは、ランニングで少し息を乱してしまっていた。
「はあ、はあっ……亮くん、終わったよ……」

「はあっ……やっぱり運動不足ね……」
タオルで汗を拭う二人に、亮は苦笑を零す。
「お疲れさん。息整うまで、少し休んでろよ」
そう言って亮は立ち上がると、調子を確かめるように手足をブラブラと揺らし始めた。
「んー……まあ、こんなもんか」
肩に手を当て腕を回した亮は、道場内を見渡し、今いる隅から対角線上に位置する場所で視線を止める。
そこで、亮が何か始めるのかと部員の視線が集まった時だ。
「よっ――」
一歩だけ助走するかのように強く踏み込んだ亮は、すぐに片手を床につけ、くるっと側転をした。それがまた勢いもあり姿勢も綺麗だったので、一層部員達の目を引く。
しかし、亮はそこで終わらなかった。
両足で綺麗に着地したかと思えば、その勢いのまま両手を床につけ、勢いよく体を伸ばして背を床につけず、ぐるっと一回り――ハンドスプリングと呼ばれるそれを行った。
「おお――!?」
アクロバティックな動きを目にして、部員達が一斉にざわめく。
そして、そこでも亮は止まらず、体操選手の如く、ハンドスプリングを連続して行い、ついには



その動きだけで道場の隅まで到達するか――に見えた。が、亮は隅の手前辺りで、両足が着いた時に、更に勢いよく踏み込んで飛び上がり、足を抱えてくるくるっと回って、綺麗に両足で着地を果たしたのだ。
その唐突に始まった、ネコ科を思わせるほどの躍動感溢れるアクロバティックな一連の動きに、将志含む部員達と恵梨花に雪奈は、あんぐりと口を開いた。
そして誰かが拍手をしようと手を動かそうとした時、亮はまたしても動いた。
その場で背を向けた形からバク転をしたのだ。それも当然のように、連続して行われ、どんどんと恵梨花と雪奈のいる位置に近づいてくる。
そして、その場に後少しという位置で亮はまた強く飛び上がり、足を抱えてくるくるっとバク宙。恵梨花と雪奈の目の前で綺麗に両足で着地した――と思ったら、その場から姿が掻き消えた。
「――はあっ!!」
気づけば、亮は恵梨花と雪奈から二メートルほど先で、拳を突き終えた姿勢で立っていたのである。そして亮は手を引くと、ひょいっという音が聞こえる調子でバク宙を行い、また恵梨花と雪奈の前に戻った。
そこで亮は再び、自分の調子を確認するように手と足をブラブラと揺らし始める。
「んー……まあ、上々ってとこか」
一人頷くと、顎(あご)が落ちかねないほどにあんぐりとしている恵梨花と雪奈に振り向いた。

「じゃあ、始めるか、恵梨花、ユキ」
その周りを一切気にした様子もないマイペースな顔に、「ちょっと待ってくれ」と思っていない者は、この場には亮を除いて一人もいなかった。
「ちょ、ちょっと、亮くん！　なんなの、今の!?　あんなのも出来たの!?」
「亮さん、体操もやってたんですか!?　すごかったです!!」
我に返った藤本姉妹が興奮した面持ちで詰め寄って、亮が面食らっている。
「今のって、さっきの準備運動のことか……？」
「準備運動!?」
「さっきのって、準備運動だったんですか……」
「あと、体操は習ったことねえよ」
「ええ!?　それならさっきのはどうして――!?」
なおも詰め寄る雪奈に亮は引き気味に答える。
「どうしてって……テレビで観て？」
「て、テレビでって……テレビ観て覚えたんですか!?」
「ああ、やってみたら出来たしな。そんで、これは受け身の練習にもいいなって思って、そこからは準備運動の一環として……」



立ち読みサンプル
はここまで

「や、やってみたら出来た……ですか」
「ああ」
頷く亮に、恵梨花が呆然とする。
「受け身……？　今のが……？　えっと、ねえ、とりあえずもう一回やって見せてよ、さっきのバク転！　バク転……だよね？」
「手を地面につけた方がバク転ね。亮さん、私もバク宙をもう一度見せて欲しいです……」
苦笑しながらそんなおねだりを恵梨花と雪奈から受ける亮を目にしながら、将志は先ほどの亮のアクロバティックな動きを思い出して呆れのため息を吐いた。
（よくよく考えたら、亮ならやれそうだと思うことだったけど……実際見たらとんでもないな）
同じような感想を抱いた千秋が感心したような声を出した。
「いやー、亮なら確かにあれぐらい出来てもおかしくないんだろうけど、見たらとんでもないね」
「な。俺も同じこと思った」
「バク宙は出来るの知ってたしさ。ほら、中学の時に都が亮にやって見せてとか言ってたことあったじゃん？」
「あー……ああ、思い出した。北原さんに言われて、亮と瞬くんがやってたっけ」
中学の同級生であり、亮と非常に親しい北原都と藤間瞬のことを思い出しながら、将志が言う。
「そうそう。体育の授業始まる前とかだったよね、確か」